

---

## 1 階微分方程式

### 変数分離形

1 階の微分方程式のうち、次の形をした方程式を変数分離形という。

$$\frac{dx(t)}{dt} = f(x)g(t) \quad (1)$$

$f(x) \neq 0$  のとき

$$\frac{1}{f(x)} \frac{dx}{dt} = g(t)$$

として両辺を  $t$  で積分すると、一般解は

$$\int \frac{1}{f(x)} dx = \int g(t) dt + C$$

ここで、 $C$  は任意定数である。

$f(x_0) = 0$  となる定数  $x_0$  があるならば、 $x(t) = x_0$  は式 (1) の解である。

---

**例 1**：微分方程式  $\frac{dx(t)}{dt} = -atx(t)$  の一般解を求めよ。ただし、 $a$  は正の定数である。

[略解]

$$x(t) = Ce^{-\frac{a}{2}t^2}$$

$C$  は任意定数。

---

**例2**：微分方程式  $\frac{dx}{dt} = -a(x(t) - 1)$  について、初期条件  $x(0) = 0$  を満たす解を求めよ。ただし、 $a$  は正の定数である。

[略解]

$$x(t) = 1 - e^{-at}$$

---

## 同次形

1階の微分方程式のうち、次の形をした方程式を同次形という。

$$\frac{dx(t)}{dt} = f\left(\frac{x}{t}\right) \quad (2)$$

変数変換  $x = tu$  を行うと

$$\begin{aligned} u + t \frac{du}{dt} &= f(u) \\ \rightarrow \frac{du}{dt} &= \frac{f(u) - u}{t} \end{aligned}$$

$f(u) - u \neq 0$  のとき

$$\frac{1}{f(u) - u} \frac{du}{dt} = \frac{1}{t}$$

---

両辺を  $t$  で積分すると、一般解は

$$\int \frac{1}{f(u) - u} du = \log |t| + C_1, \quad x(t) = tu$$

$C_1$  は任意定数である。

$f(u) - u = 0$  のとき、 $f\left(\frac{x}{t}\right) = \frac{x}{t}$  であるので、式 (2) は

$$\frac{dx(t)}{dt} = \frac{x}{t}$$

となるから、その一般解は  $x(t) = Ct$  ( $C$  は任意定数) となる。

---

**例3**：微分方程式  $x^2(t) - \{tx(t) - t^2\} \frac{dx(t)}{dt} = 0$  の一般解を求めよ.

[略解]

$$x(t) - Ce^{\frac{x(t)}{t}} = 0$$

---

## 1 階線形微分方程式

関数  $p(t)$ ,  $q(t)$  が与えられている。線形の微分方程式

$$\frac{dx(t)}{dt} + p(t)x(t) = q(t) \quad (3)$$

を 1 階線形微分方程式という。

同次方程式  $q(t) \equiv 0$  の場合,  $x(t) \neq 0$  のとき

$$\frac{1}{x} \frac{dx}{dt} = -p(t)$$

両辺を  $t$  で積分して

$$\int \frac{1}{x} \frac{dx}{dt} dt = \log |x(t)| = - \int p(t) dt + C_1$$

$C_1$  は任意定数である。

---

$x > 0$  のとき  $e^{C_1}$  を  $C$ ,  $x < 0$  のとき  $e^{C_1}$  を  $-C$  とおくと,  $x(t) = Ce^{-\int p(t)dt}$  で表すことが出来る。 $x(t) = 0$  のときは  $C = 0$  に対応する。従って、一般解は

$$x(t) = Ce^{-\int p(t)dt}$$

定数変化法により非同次方程式の解を求める。非同次方程式の解を同次方程式の一般解における定数  $C$  を  $t$  の関数  $C(t)$  として

$$x(t) = C(t)e^{-\int p(t)dt}$$

と仮定する。

式 (3) へ代入すると

$$\begin{aligned} \frac{dC(t)}{dt}e^{-\int p(t)dt} - p(t)x(t) + p(t)x(t) &= q(t) \\ \rightarrow \frac{dC(t)}{dt}e^{-\int p(t)dt} &= q(t) \end{aligned}$$

---

整理して両辺を  $t$  で積分すると

$$C(t) = \int q(t) e^{\int p(t) dt} dt + C$$

$C$  は任意定数である。従って、一般解は

$$x(t) = e^{-\int p(t) dt} \left\{ \int q(t) e^{\int p(t) dt} dt + C \right\}$$

初期条件  $x(t_0) = x_0$  が与えられたときの特殊解は、 $C = x_0$  とおき、不定積分を定積分として

$$x(t) = e^{-\int_{t_0}^t p(\tau) d\tau} \left\{ \int_{t_0}^t q(\tau) e^{\int_{t_0}^\tau p(\xi) d\xi} d\tau + x_0 \right\}$$

となる。

---

**例4**：微分方程式  $\frac{dx(t)}{dt} + x(t) = t$  の一般解を求めよ。

[略解]

$$x(t) = t - 1 + Ce^{-t}$$

$C$  は任意定数。

---

## ベルヌーイ形

1 階の線形微分方程式のうち、次の形をした方程式をベルヌーイ形という。

$$\frac{dx(t)}{dt} + p(t)x(t) = q(t)x^n(t) \quad (n \neq 0, 1) \quad (4)$$

変数変換  $u = x^{1-n}$  を行うと

$$\begin{aligned} (1 - n)x^{-n}\frac{dx(t)}{dt} + (1 - n)p(t)x^{1-n} &= (1 - n)q(t) \\ \rightarrow \frac{du}{dt} + (1 - n)p(t)u &= (1 - n)q(t) \end{aligned}$$

これは、 $u$ についての 1 階線形微分方程式である。

---

**例5**：微分方程式  $\frac{dx(t)}{dt} + \frac{3}{4t}x(t) + \frac{1}{4}t^3e^tx^5(t) = 0 \quad (t > 0)$  の一般解を求めよ。

[略解]

$$\frac{1}{x^4(t)} = t^3(e^t + C)$$

$C$  は任意定数。

---

$n$  個の関数  $x_i(t)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) が,  $n$  階同次線形微分方程式  $\sum_{i=0}^n a_i(t)x^{(i)}(t) = 0$  の解ならば, 重ね合わせの原理より,  $c_i$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) を任意定数として,  $x(t) = \sum_{i=1}^n c_i x_i(t)$  も解である.

$n$  個の関数  $x_i(t)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) が, 恒等的に  $\sum_{i=1}^n c_i x_i(t) = 0$  となるような定数  $c_i \neq 0$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) が存在するとき, 関数  $x_i(t)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) は一次独立であるという.

$n$  階同次線形微分方程式  $\sum_{i=0}^n a_i(t)x^{(i)}(t) = 0$  の解全体は,  $\mathbb{R}$  上の  $n$  次元ベクトル空間をなす.  $\Leftrightarrow$   $n$  階同次線形微分方程式の互いに一次独立な解  $x_i(t)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) の一次結合  $x(t) = \sum_{i=1}^n c_i x_i(t)$  は  $n$  階同次線形微分方程式の解であり, 全ての解がこの形で表される (これ以外に解は存在しない).

---

$n$  個の関数  $x_i(t)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) に対して

$$\Delta(t) = \begin{vmatrix} x_1(t) & x_2(t) & \cdots & x_n(t) \\ \frac{dx_1(t)}{dt} & \frac{dx_2(t)}{dt} & \cdots & \frac{dx_n(t)}{dt} \\ \vdots & \vdots & \cdots & \vdots \\ \frac{d^{n-1}x_1(t)}{dt^{n-1}} & \frac{d^{n-1}x_2(t)}{dt^{n-1}} & \cdots & \frac{d^{n-1}x_n(t)}{dt^{n-1}} \end{vmatrix}$$

をこれらの関数のロンスキアンという。

ロンスキアン  $\Delta(t) \neq 0$  であれば、関数  $x_i(t)$  ( $i = 1, 2, \dots, n$ ) は一次独立である。

一次独立の解の組  $\{x_1(t), x_2(t), \dots, x_n(t)\}$  は解の基本系と呼ばれ、 $x(t) = \sum_{i=1}^n c_i x_i(t)$  は同次方程式の一般解を与える。

---

**例6**：関数  $x_1(t) = e^t$ ,  $x_2(t) = e^{-t}$  は一次独立であるかどうか調べよ。

[略解]

一次独立である。

---

## 2階線形微分方程式

関数  $p(t)$ ,  $q(t)$ ,  $f(t)$  が与えられている。線形の微分方程式

$$\frac{d^2x(t)}{dt^2} + p(t)\frac{dx(t)}{dt} + q(t)x(t) = f(t) \quad (5)$$

を 2 階線形微分方程式という。

同次線形方程式  $\frac{d^2x(t)}{dt^2} + p(t)\frac{dx(t)}{dt} + q(t)x(t) = 0$  の 2 つの解を  $x_1(t)$ ,  $x_2(t)$  とするとき、重ね合わせの原理より、 $c_1$ ,  $c_2$  を任意定数として  $x(t) = c_1x_1(t) + c_2x_2(t)$  も解である。

ロンスキアンは

$$\Delta(t) = \begin{vmatrix} x_1(t) & x_2(t) \\ \frac{dx_1(t)}{dt} & \frac{dx_2(t)}{dt} \end{vmatrix} = x_1(t)\frac{dx_2(t)}{dt} - \frac{dx_1(t)}{dt}x_2(t)$$

である。

---

同次方程式の2つの独立な解を  $x_1(t)$ ,  $x_2(t)$  とする.

$x_1(t)$ ,  $x_2(t)$  は一次独立な解であるからロンスキアンは

$$\Delta(t) = x_1(t) \frac{dx_2(t)}{dt} - \frac{dx_1(t)}{dt} x_2(t) \neq 0$$

定数変化法により非同次方程式 (5) を解くため, 方程式の解を

$$x(t) = \eta_1(t)x_1(t) + \eta_2(t)x_2(t) \quad \cdots \textcircled{1}$$

とおく. ただし

$$\frac{d\eta_1(t)}{dt}x_1(t) + \frac{d\eta_2(t)}{dt}x_2(t) = 0 \quad \cdots \textcircled{2}$$

を満たしているものとする.

---

①を式(5)へ代入し、式②を用いて整理すると

$$\begin{aligned} & \frac{d^2x(t)}{dt^2} + p(t)\frac{dx(t)}{dt} + q(t)x(t) \\ &= \eta_1(t) \left\{ \frac{d^2x_1(t)}{dt^2} + p(t)\frac{dx_1(t)}{dt} + q(t)x_1(t) \right\} \\ &+ \eta_2(t) \left\{ \frac{d^2x_2(t)}{dt^2} + p(t)\frac{dx_2(t)}{dt} + q(t)x_2(t) \right\} \\ &+ \frac{d\eta_1(t)}{dt}\frac{dx_1(t)}{dt} + \frac{d\eta_2(t)}{dt}\frac{dx_2(t)}{dt} = f(t) \end{aligned}$$

ここで、 $x_1(t)$ ,  $x_2(t)$ は同次方程式の解より、{}内は0であるから

$$\frac{d\eta_1(t)}{dt}\frac{dx_1(t)}{dt} + \frac{d\eta_2(t)}{dt}\frac{dx_2(t)}{dt} = f(t) \quad \cdots ③$$

---

②, ③の連立方程式を  $\frac{d\eta_1(t)}{dt}, \frac{d\eta_2(t)}{dt}$  について解くと

$$\frac{d\eta_1(t)}{dt} = -\frac{f(t)x_2(t)}{x_1(t)\frac{dx_2(t)}{dt} - \frac{dx_1(t)}{dt}x_2(t)}$$

$$\frac{d\eta_2(t)}{dt} = \frac{f(t)x_1(t)}{x_1(t)\frac{dx_2(t)}{dt} - \frac{dx_1(t)}{dt}x_2(t)}$$

$t$  で積分して

$$\eta_1(t) = - \int \frac{f(t)x_2(t)}{\Delta(t)} dt + C_1$$

$$\eta_2(t) = \int \frac{f(t)x_1(t)}{\Delta(t)} dt + C_2$$

$C_1, C_2$  は任意定数である。

---

従って、一般解は

$$x(t) = C_1 x_1(t) + C_2 x_2(t) - x_1(t) \int \frac{f(t)x_2(t)}{\Delta(t)} dt + x_2(t) \int \frac{f(t)x_1(t)}{\Delta(t)} dt \quad (6)$$

である。

---

**演習問題 1** : 次の1階微分方程式の一般解を求めよ.

$$(1) \frac{dx(t)}{dt} - 2t = 0$$

$$(2) \frac{dx(t)}{dt} - 2tx(t) = 0$$

$$(3) \frac{dx(t)}{dt} + 2tx(t) = t$$

$$(4) \frac{dx(t)}{dt} + \{x(t) - 3\}e^t = 0$$

---

**演習問題2** : 次の関数  $x_i(t)$  ( $i = 1, 2, \dots$ ) は, 一次独立かどうか調べよ.

(1)  $x_1(t) = e^{\lambda_1 t}, \quad x_2(t) = e^{\lambda_2 t}, \quad \lambda_i \neq 0 \quad (i = 1, 2)$  は定数

(2)  $x_1(t) = e^{i\omega t}, \quad x_2(t) = e^{-i\omega t}, \quad \omega \neq 0$  は定数

(3)  $x_1(t) = \cos \omega t, \quad x_2(t) = \sin \omega t, \quad \omega \neq 0$  は定数

(4)  $x_1(t) = e^t, \quad x_2(t) = e^{-t}, \quad x_3(t) = e^{it}, \quad x_4(t) = e^{-it}$